

石川県立図書館蔵川口文庫『文筆問答鈔』の研究 (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳澤, 良一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46376

石川県立図書館蔵川口文庫

『文筆問答鈔』の研究 (二)

柳澤良一

三 川口文庫本『文筆問答鈔』の翻刻

【本文】(上四丁ウツつき)

問¹⁵ 題目破題譬喻述懐^ト云名言¹⁶如何 答第一発句^ヲ名題目^ト
事^ハ／拳^ル其詩題^ヲ故云題目^ト第二胸句^ヲ名破題^ト事^ハ作用^ヲ分
破^ス之¹⁸故¹⁹之¹⁹云破題^ト也²⁰破^ト分破^ト破^ト破^ト破^ト非^レ
破^ニ也²³第三腰句^ヲ名譬喻^ト事^ハ／拳^テ相似^ヲ物躰^ヲ比親況^ス²⁵
故云譬喻^ト第四落句^ヲ名述懐^ト事^ハ／待^テ述^テ顯思懐^ト故^ニ
云述懐^ト也²⁸其證文可引²⁹」

〔(上四丁ウツつき)〕

【校異】(上四丁ウツつき)

- (15) 問—の前に尊「題目破題譬喻述懐事」あり。
- (16) 述懐云名言—内「述懐名言」。
- (17) 故云題目—内「故」。
- (18) 作用分破—内「分破作用」。
- (19) 故之—尊「故是」。
- (20) 故之云破題也—内「故」。

(21) 破—尊「破者」。

(22) 破懐—尊・内「破壊」。

(23) 破分破破破壊非破也—内ナシ。

(24) 名譬喻事—内「名譬喻」。

(25) 比親況—内「比況」。

(26) 故云譬喻—尊「故云譬喻也」。内「故」。

(27) 事其待述顯思懐故云述懐也—尊「事其詩述顯思懐故云述懐也」。

内「顯述其詩述顯思懐故也」。

(28) 證文—内「證」。

(29) 可引—内「可見之」。

【本文】(上五丁オ)

五「」字、題〈王沢抄文〉

待^レ花^ヲ催^ス勝遊^ヲ

〈題目〉斯^レ地^ヲ勝遊^ハ縁^レ底^ニ催^ス 催^レ勝遊^ヲ兒^也／

〈破題〉恋^レ粧^ヲ先^ニ展^テ言^フ詩^ヲ席^ニ 期^レ艶^ヲ且^カ斟^ム命^ス飲^ム

由^テ哉^カ／

サツキ
盃ノ

恋粧先展且斟 待_レ花心也 言詩席命_レ飲盃 催_レ勝ノ

〔譬諭〕 歌勸_レ和声_ヲ鶯_ノ未_レ出_テ舞_ニ思_ハ儂曲_ヲ蝶_遅来_ルノ
歌勸_レ和声_ヲ舞_ニ思_ハ儂曲_ヲ催_レ勝_ヲ遊_ヲ譬_レ諭_也

鶯未_レ出_テ心也 蝶_遅来_ルノ 待_レ花比況也ノ
此_レ楊梅桃李_ノ一時_ノ興_ヲ尚_ク桜花_ノ劣_ル故_ニ花興詩_ト述_ス

〔述懐〕 楊梅桃李_ノ一時_ノ興_ヲ尚_ク桜花_ノ劣_ル故_ニ花興詩_ト述_ス

一字ノ百詠詩〔文胎韻〕(8) 〔(上五丁オ)〕

〔校異〕(上五丁オ) (1) 「五字題〔王沢抄文〕」以下「花興詩述懐也」までの例詩ノ内

ナシ。

(2) 灰始韻ノ底「待花催勝遊」の下にあるも一句目〔斯地勝遊縁底催〕

の下に移動する印あり。尊は二句目「待花終日有由哉」の下に

あり。

(3) 言詩序ノ底「言」の左傍「ケン」、_レ「詩」の左傍「シノ」、_レ「席

の左傍「セキ」。

(4) 勸ノ尊「歛」。

(5) 未ノ底「末」の左傍「ス」。

(6) 勸ノ尊「歛」。

(7) 心也ノ尊ナシ。

(8) 一字百詠詩〔文胎韻〕ノ尊「二字題〔百詠詩〕題 日」内

「日〔百詠詩ノ支韻〕」。

〔本文〕(上五丁ウ) 〔題目〕日出_テ扶桑_ノ路_ヲ遙_ニ昇_ル若木_ノ枝_ニ

〔破題〕 雲_ノ間_ニ五色_ノ滴_リ霞_ノ際_ニ九光_ノ披_ク

〔譬諭〕 東_ノ陸_ニ蒼_ノ龍_ノ駕_ス南_ノ郊_ニ赤_ノ羽_ノ馳_ス

〔述懐〕 傾_レ心_ニ葵_ノ藿_ニ比_レ心_ニ奉_ル公_ニ

〔是〕_レ述_レ懐_ノ句_也ノ

〔校異〕(上五丁ウ) (1) 若木枝ノ尊「若木枝〔支脂韻〕」。

(2) 此日ノ内「此初日」。

(3) 色光ノ内「光色」。

(4) 色光ノ内「色彩」。

(5) 色光ノ内「光用」。

(6) 葵藿比ノ底「葵藿」の右傍「ナラフルモノナラハ」とあるも

尊により「比」の右傍に移す。底は「藿」の左傍「クワク」。

(7) 是ノ尊ノ内「此」。

(8) 述懐句也ノ内「述思懐合上来也」。

(9) 藿花随日回傾也如此傾心奉公奉堯曠同述懐述思懐義也ノ内ナ

シ。

- (10) 回一尊「廻」。
- (11) 如此一尊「如其」。
- (12) 奉一底「奉」の右傍「ツカウマルト也」なるも尊「ツカウマツランニ」により改める。

【本文】(上五丁ウつつき)

按詩 題事

問按、詩題様如何 答於、題一字、題五字〔一〕六字、題双貫、題虚
 実、題等辺々〔二〕有之也 問一々、作〔三〕如何 答一字、題者漢土
 百詠題和朝朗詠／題是也〔四〕 五字題者王沢抄所載是也〔五〕 双貫
 題者於〔六〕一詩詠〔七〕一物也／王沢抄〔八〕云双貫、題者〔九〕朝
 暮聞鶯声也〔十〕 朝暮、二字双貫也／其鉢二鉢、故聞鶯声云
 三字、用也 虚題、々々一物也 前、如待花〔一〕 (上五丁ウ)

【校異】(上五丁ウつつき)

- (1) 五字一内「乃至五字」。
- (2) 辺々一内「種々」。
- (3) 作一内「作鉢」。
- (4) 者漢土百詠題和朝朗詠題是也一内「如右」。
- (5) 者王沢抄所載是也一内「山谷詩燈下尋書義等是也」。
- (6) 者於一内ナシ。
- (7) 詩詠一尊「題々」。
- (8) 王沢抄一内「王沢抄」。
- (9) 双貫題者一内ナシ。

(10) 也一尊・内「云々」。

- (11) 其鉢二鉢故聞鶯声云三字用也虚題々一物也前如待花一尊「其鉢二鉢故聞鶯声云三字用也常題々一物也前如待花」(下線部分)。
内ナシ。

【本文】(上六丁オ)

催勝遊云題者花、一字、鉢也、余、四字、用也〔一〕 虚実、題者於
 此有、辺々説、依、王沢抄、意、待花、催勝遊云題、時、花遊、二
 字、実字待、催勝、三字、虚字也、又林下多、芳草、云、題、時、林草、
 二字、実、字下多芳、三字、虚、字也、此等、本鉢、云、実、作用、云、虚
 也、依、作文、大鉢、意、出、於、経籍、／奥理、謂、之、実題、懸
 於、風月、浮花、謂、之、虚題、也、此、作、経教、典籍、奥理、云、実
 作、花鳥風月之浮言、云、虚也、已上、両説、和朝、作詩、鉢也、所、載、三
 鉢、詩、虚実、鉢、太別也、儒者、名、近、可、相、尋、(2)

序与詩作鉢(3)事

問序与詩作鉢如何 答王沢抄云

春、日、賦、待、花、催勝遊、詩一首(并序) 某甲

観、夫(発句)以、景物、超、異物、為、初鉢也 (上六丁オ)

【校異】(上六丁オ)

- (1) 催勝遊云題者花、一字鉢也、余、四字用也一内ナシ。
- (2) 於此有、辺々之説、依、王沢抄、意、待花、催勝遊云題、時、花遊、二字、実字待、
 催勝、三字、虚字也、又林下多、芳草、云、題、時、林草、二字、実字、下多芳、三字、
 虚字也、此等、本鉢、云、実作用、云、虚也、依、作文、大鉢、意、出、於、経籍、奥理、謂、之

実題懸於風月浮花謂之虛題也此作經教典籍輿理云実作花鳥風月之浮言云虚也已上兩說和朝作詩躰也所載三躰詩虚実躰太別也儒者名近可相尋一專「於此有辺々之說依王沢抄意待花催勝遊云題時花遊二字実字待催勝三字虚字也又林下多芳草云題時林草二字実字下多芳草三字虚字也此等本躰云実作用云虚也依作文大躰意出於經籍輿理謂之實題懸於風月浮花謂之虛題也此作經教典籍輿理云実作花鳥風月浮言云虚也已上兩說和朝作詩之躰也所載三躰詩虚実躰太別也儒者名近可相尋」(傍線部分)。内「有多義(大小虚実題等更可師受也)」。

(3) 作躰一底：内「躰」一「体」なるも、底の目次題によつて改める。

【本文】(上六丁ウー上七丁オウツク)

〔密々〕(一) 山霞破・暖風(平)

数重之錦好・曝(他) /

〔上五〕(下六) 溪雪消・遲日(他)

一片之色穢残(平) / (一段) /

于時(傍句) /

〔軽々〕(二) 風漸・暖(他)而

聞・歌鶯之声消(他) /

〔上四〕(下六) 日已・遲(平)而

見・舞蝶之翅・輕(平) / (二段) /

方今(傍句) /

〔六字〕(長句) 待・新花之未(平)開

催・勝遊之有(他)興(他) / (三段)

〔六字〕(長句) (5) 至^テ于^ニ如^ク (傍句) /

風暖^ニ而添^フ濃淡^ニ (他)

〔軽々〕(上四下六) (6) 露染^チ而交^ル淺深^ニ (平) /

遙^ニ如^ク沈響^ノ之薰^ル (平) /

〔軽々〕(上四下六) (7) 庭^ノ前^ニ粧散^ル (他)

誤疑^テ錦繡^ノ之幅^ヲ (平) (ハタハリ也) (9)

〔緊句〕 何物^ニ如^ク之^ニ (平)

誰人^カ不^レ賞^ム (他) (四段) /

如^レ予^者 (傍句) (此云自謙句)

不才^ニ而採^リ紙^ヲ (他)

也 /

〔五字〕(長句)

蒙昧^ニ而染^ム筆^ヲ (平) /

〔漫句〕

推^シ当^リ唱首^ヲ /

〔詩〕

已迷賦^ニ花云^ニ尔^ハ (五段) /

斯地勝遊^ノ縁^ニ (底催)

待花^ノ終日^ニ有^リ由哉^カ (灰吟) (12) /

恋粧^ノ先^ニ展^キ言^ハ詩席^ヲ /

期^ノ艶^ニ且^ニ斟^ム命^ヲ飲^ム盃^ヲ /

歌^ノ勸^ニ和^シ聲^ヲ鶯^ノ未^レ出^ズ /

舞^ノ思^ハ儺^ノ曲^ヲ蝶^ノ遲^ク來^ル /

楊梅桃李^ハ一時^ニ興^ル /

猗矣^ト今朝^ニ呈^ス拙^ナ才^ヲ /

「(上七丁オウツク)

【校異】（上六丁ウ、上七丁オツつく）

- (1) 密々―底は「密々／＼」の次に誤字二字の上に二重線。
- (2) 「滑」の訓「ナメラカナルヲ」―底「ナメラカスヲ」を尊・内によつて改める。
- (3) 未―底・尊は左傍「ルヲ」。
- (4) 至于―内「至」。
- (5) 六字／長句―内「同」。
- (6) 軽々／上四下六―尊「軽々」。
- (7) 軽々／上四下六―底ナシ。内「同」によつて補う。尊「上四／下六」。
- (8) 「幅」の訓「ハタモノカト」―底・尊「ハタモノヲ」を内によつて改める。
- (9) ハタハリ也―尊・内ナシ。
- (10) 此―内「是」。
- (11) 「縁」の訓「ツテカ」―底「テハラカ」を尊・内によつて改める。
- (12) 灰哈―内「灰韻」。
- (13) 未―底は左傍「ス」。

四 校訂本文

五、題目・破題・譬諭・述懐の事

五、題目・破題・譬諭・述懐の事

問、題目・破題・譬諭・述懐云、名言如何。答、第一發句名、題目、事、挙、其詩、題、故云、題目。第二胸句名、破題、事、分、破、作用、故之云、破題也。破、分破、破、破壞、（3）非破也。第三腰句名、譬諭、事、挙、相似、物、比、觀、況、故云、譬諭也。第四落句名、述懐、事、其詩、述、思、懷、故云、述懐也。其證文可引。

五字、題（王沢抄）文

待花催勝遊 兒也。

〔題目〕斯地勝遊縁、底催、（灰哈韻）待花終日有

由哉

〔破題〕恋粧先展言詩席、期艶且斟命、飲

命、粧、先、展、且、斟、待、花、心、也。言、詩、席、

〔譬諭〕歌勸、和声、鶯、未、出、舞、思、儷、曲、蝶、遲、來、

鶯、未、出、蝶、遲、來、待、花、比、況、也。

〔述懐〕楊梅桃李一時興、倚突、今朝呈、拙才、

此、楊、梅、桃、李、一、時、興、尚、桜、花、劣、故、花、興、待、

〔題目〕日出、扶桑、路、遙、昇、若、木、枝、

〔此日出兒也〕

一字、百詠、詩（支脂韻）

〔題目〕日出、扶桑、路、遙、昇、若、木、枝、

〔此日出兒也〕

〔破題〕雲間五色滴 霞際九光披

〔此〕拳日輪、色光用也。

〔譬喻〕東陸蒼龍駕 南郊赤羽馳

〔此〕以青龍赤鳥、色光比日輪、色光也。

〔述懷〕傾心葵藿比 朝夕奉堯曦

〔此〕述懷、句也。

藿花隨日回傾也。如此傾心奉公

奉堯曦同。堯曦同。云。述懷述思懷義也。

〔校訂注記〕

〔1〕題目破題譬喻述事―底・内ナシ。尊・目錄によつて補う。

〔2〕分破作用―底・尊「作用分破」なるも内によつて改める。

〔3〕破壊―底「破懷」なるも尊によつて改める。

〔4〕比觀況―「比況」の誤りか。

〔5〕其詩―底「其侍」なるも尊・内によつて改める。

〔6〕支脂韻―底「文胎韻」なるも尊によつて改める。内「支韻」。

〔7〕此―底「是」なるも尊・内によつて改める。

〔注〕

題目、破題、譬喻、述懷の名が付いた理由と、これらの聯を作者がどのように詠むのかということ述べる。

題目の首聯は詩の題を詠み入れ、破題の領聯は「作用を分破」し、譬喻の頸聯は「相似の物躰」を詠み、述懷の尾聯は「思懷を述べ頭は」すと説明する。

そして、その「證文」として『王沢不渴鈔』から五字の題の七言律詩、『百詠詩』から一字の題の五言律詩を引用し、それぞれ簡潔な説明を

加えている。ただし、内閣文庫本には前者の「花を待ちて勝遊を催す」の七言律詩は載らない。川口文庫本及び尊経閣文庫本の写本の上に載り、刊本の内閣文庫本では省かれている。

なお、「比觀況」は「比況」〔譬喻〕に同じの誤りかと思うが、元のままにしておいた。

「花を待ちて勝遊を催す」(待花催勝遊)の詩は、『王沢不渴鈔』上巻に「勝遊詩」として見える。すなわち、静嘉堂文庫蔵の寛永十一年版本『王沢不渴鈔』には、

○勝遊詩○以盃為韻〔原文は「句」〕／
斯地勝遊縁底催 詩花終日有由哉
忽粧先展言詩 席期艶且斟命飲

和声鶯未出舞／○思儂曲〔儂〕の左傍「催」蝶遅来
○桜梅桃李一時興〔興〕の左傍「此句遊意也」倚矣／今朝呈
拙才 恋〔恋〕の左傍「シタウ」粧 花 事也。

恋待儀也。詩席詩歌／坐敷也。待艶、艶花、事也。
○且斟〔原文は「基」の右横「欠」の誤字〕飲、且、少々儀也。
花待／問少酒吞、汲儀也。待問、事也。○琴、音、落梅、

曲。依之花、和声云也。○舞、儂曲者儂ハウルハシキ
トヨム也。美曲、事也。蝶遅来云、花待、事也。蝶花付

故也。桜梅桃李一時興、是何春盛、花木也。下句勝
遊催云儀也。拙才、才、述懷也。我才云故也。述懷、下句

云籠也。才如上云也。○実、字三字是也。朝暮鶯、三
字出。此意、題中此三字、肝要、字云事也。依、

字云也。虚実、二字分別、時、虚字、実、字云儀、非也。とある。(一)は改行、(二)は私に補った注意書き。また、意味を理解しやすくするために、字間にアキを作り、句読点を付けた。

印融は、『文筆問答鈔』を著すにあたって、『王沢不渴鈔』のこの箇所を、題目・破題・譬諭・述懐の説明として利用したのであるが、『王沢不渴鈔』の本文の傍注、例えば「恋粧」の右傍に「待花」とあり、これを破題の説明として、「粧シズメひを恋ふ」とは花を待つ心を表すと、適切に取り入れている。譬諭・述懐についても同様である。なお、これら題目・破題・譬諭・述懐の句の詠み方については、佐藤道生氏に专著がある(佐藤道生氏「句題詩概説」(佐藤道生編著「句題詩研究―古代日本の文学に見られる心と言葉―」慶應義塾大学二世紀COE心の統合的研究センター、二〇〇七年(平成十九)三月)。
韻の示し方は、『王沢不渴鈔』が韻字「盃」で示すのに対して、『文筆問答鈔』は「盃」字に属する上平声十灰韻の中から「灰」字と「哈」(音、カイ)字を代表させて「灰哈韻」としている。なお、一句目の末尾の「催」字も上平声十灰の平声なので、ここも韻を踏んでいることになる。『王沢不渴鈔』では、「斝カを期して且カがつ斟クムむ飲ムに命ずる盃」の句が「古詩」の「遊其牽ケン。盃催クハヒ・興味」を踏まえていると言うが、その出典は未詳である。
平仄を、平声は○印、仄声は●印、韻字を◎印で示すと、次のようになる。平仄や押韻など、すべてこれまでと言ってきた規則が厳密に守られていることが分かる。

●○○○○●●
○○○○○○●●
●○○○○●●
○○○○○○●●

●○○○○○○●●
○○○○○○●●
●○○○○○○●●
○○○○○○●●
●○○○○○○●●
○○○○○○●●
●○○○○○○●●
○○○○○○●●

次に、李嬌の『百詠詩』であるが、これは「李嬌雜詠」乾象部十首の冒頭、「日」題の五言律詩である。諸本間に本文に異同はない。韻字は枝・披・馳・曠であるので、韻は上平声四支韻である。したがって、川口文庫本の韻の表記「文胎韻」は誤りと考えて、尊経閣文庫本の「支脂韻」と正した。なお、拙稿「破題」(『古典文学レトリック事典』(『国文学 解釈と教材の研究』第三十七巻十五号、一九九二年(平成四)十二月)参照。

六、詩の題を按ずる事

六、按スレ詩シ題テイ事ジ
問、按スレ詩シ題テイ様サマ如何ニ。答コタヘ、於オケレ題テイ一字イチ、題テイ五字ゴジ乃至ニ六字ロクジ、題テイ・双貫スウクワン題テイ・虚実キョウジツ、題テイ等トナリ辺々ヘヘ有アルレ之ノ也。
問、一々イチイチ作ツク鉢ハチ如何ニ。答コタヘ、一字イチ題テイ者シヤ漢土カンツ、百詠ヒャクテイ、題テイ・和朝ワテウ、朗詠ロウテイ、題テイ是シ也。五字ゴジ題テイ者シヤ王沢抄オウタクセウ所シヨ載サイ、是シ也。双貫スウクワン題テイ云クニ、

於^イ詩^ニ詠^{スル}二物^ヲ也。王^ニ沢^抄云^フ、双^ハ貫^ト題^ト者^ハ朝^暮聞^カ鶯^ノ聲^一也。朝^暮二^ニ字^ヲ双^ハ貫^ト也。其^ハ隼^ニ二^ハ故^聞鶯^ノ聲^云三^ニ字^ヲ用^ス也。虚^ニ題^ト々^々一^ニ物^ヲ也。前^ニ如^ク待^テ花^ニ催^テ勝^遊云^フ題^ト者^ハ花^一字^ヲ隼^ニ也。余^ハ四^ニ字^ヲ用^ス也。虚^ニ実^ト題^ト者^ハ於^テ此^ニ有^リ辺^々々^々。依^テ王^ニ沢^抄意^ニ、待^テ花^ニ催^テ勝^遊之^レ題^ト時^ハ、花^遊二^ニ字^ヲ、実^ト字^ヲ、待^テ催^テ勝^遊三^ニ字^ヲ、虚^ニ字^ヲ也。又^ハ林^下多^ク芳^草云^フ題^ト時^ハ、林^草二^ニ字^ヲ、实^ト字^ヲ、下^ニ多^ク芳^草三^ニ字^ヲ、虚^ニ字^ヲ也。此^レ等^ハ本^ニ隼^ニ云^フ実^ト作用^云虚^ト也。依^テ作^文大^ニ隼^ニ意^ニ、出^テ於^テ経^籍輿^理、謂^フ之^レ実^ト題^ト、懸^テ於^テ風^月浮^花之^レ浮^言云^フ虚^ト也。此^レ作^レ経^教典^籍輿^理云^フ実^ト、於^テ風^月浮^花之^レ浮^言云^フ虚^ト也。此^レ作^レ経^教典^籍輿^理云^フ実^ト、已^ハ上^ニ、兩^ニ說^ハ和^朝作^詩隼^也。所^レ載^ハ三^ニ隼^ニ詩^ニ虚^実隼^ハ太^ハ別^也。儒^者名^近可^ク相^尋。

【校訂注記】

- (1) 乃至五字一底・尊「五字」なるも内によつて補う。
- (2) 作隼一底・尊「作」なるも内によつて補う。
- (3) 者王沢抄等題是也一尊「者王沢抄所載是也」。内「山谷詩燈下尋書義等是也」。
- (4) 其隼二隼故聞鶯声云三字用也虚題々一物也前如待花催勝遊云題者花一字隼也余四字用也一尊「其隼二隼故聞鶯声云三字用也常題々一物也前如待花催勝遊云題者花一字隼也余四字用也」(傍線部分)。内ナシ。
- (5) 於此有辺々之說依王沢抄意待花催勝遊云題時花遊二字実字待催勝三字虚字也又林下多芳草云題時林草二字实字下多芳三字虚字也此等本隼云実作用云虚也依作文大隼意出於経籍輿理謂之実題

懸於風月浮花謂之虚題也此作経教典籍輿理云実作花鳥風月之浮言云虚也已上兩說和朝作詩隼也所載三隼詩虚実隼太別也儒者名近可相尋一尊「於此有辺々之說依王沢抄意待花催勝遊云題時花遊二字実字待催勝三字虚字也又林下多芳草云題時林草二字実字下多芳三字虚字也此等本隼云実作用云虚也依作文大隼意出於経籍輿理謂之実題懸於風月浮花謂之虚題也此作経教典籍輿理云実作花鳥風月浮言云虚也已上兩說和朝作詩之隼也所載三隼詩虚実隼太別也儒者名近可相尋。内「有多義(大小虚実題等更可師受也)」。

【注】

詩の題についての説明である。作詩にあたっては、題をよく考えよということ述べる。

一字の題は李嶠の『百詠詩』(『和漢朗詠集』)に見えるものであり、五字の題は前項の「五、題目・破題・譬喻・述懐の事」でも引用した『王沢不渴鈔』の「花を待ちて勝遊を催す」(待花催勝遊)題、また「朝暮に鶯の声を聞く」(朝暮聞鶯声)題を言うとする。その中で、底本や尊経閣文庫本が「五字の題とは王沢抄の載する所、是れ也」と言うのに対し、内閣文庫本などの刊本は、この箇所を「山谷詩に燈下に書義を尋ぬる等、是れなり」と変更する。しかし、これは刊本の編者の賢しらで、山谷は、中国、北宋の詩人書家の黃庭堅(一〇四五―一一〇五)の号であるものの、その総集にこのような題の作品は載らないし、またこの句が詠み入れられた漢詩の作品もない。これは、北宋の政治家・文人である王安石(一〇二一―一〇八六)の『古文真宝前集』「勸学文」に載る「王荊公の勸学の文」(王安石は荊国公に封じら

れたので王荊公と呼ばれる」という、読書の効用及び学問の勧めを説いた句の一節で、

窓前に古書を見て、燈下に書義を尋ねよ

(窓前看古書、燈下尋書義)

とある。したがって、「山谷」云々の誤りは明らかである。どのような経緯でこのような誤りが生じたのかということは興味ある問題であるが、今はその指摘にとどめておく。

次に、双貫の題と虚実の題を説明する。これを合せてこの部分は、『作文大体』「第一、題を按ず」(第一、按題)の、

凡そ作詩の道は、先に題目を案じ、然る後に翰を染む。詩に長短有り、題に虚実有り。経籍より出でたる奥理は、之を実題と謂ふ。風月の浮花に懸くるをば、之を虚題と謂ふ。或いは双関の題有るべし。一つ題の中に二物相双ぶ。(凡作詩之道、先案題目、然後染翰焉。詩有長短、題有虚実。出於経籍奥理者、謂之実題。懸於風月浮花者、謂之虚題。或可有双関之題。一題之中二物相双也。)

とある内容と関連のあることが分かる(本文と訓みは、小沢正夫氏「作文大体注解(上)」(『中京大学「文学部紀要」(第十九卷第二号、一九八四年)、同氏「作文大体注解(下)」(『中京大学「文学部紀要」(第十九卷第三四号、一九八五年)』を底本とし、山崎誠氏「智山書庫蔵「作文大体」翻刻と解説」(国文学研究資料館文献資料部「調査報告」(第二十四号、二〇〇三年)で補訂した。これによれば、まず「双貫」は「双関」に同じと考えられる。中世には一般に「双貫」の語が用いられたようである。「双関の躰」は「作文大体」(「詩雜例」)にも、「双関躰」として、

秋声管絃に脆しといふ題に管三品の詩に云はく、落葉の響き孤竹に随つて乱れ、長松の韻七絲を逐つて軽し。是れ則ち管と絃と上下の句に別けて作りたるなり。毎句此くの如し。(秋声脆管絃題管三品詩云、落葉響隨孤竹乱、長松韻逐七絲輕。是則管与絃上下句別作也。毎句如此。)

という例と説明がある。「双関」「双貫」とは、小沢氏がその注の中で、「二つの物が互いに関係があること。関係ある二つの物(例えば「管」と「絃」とはどちらも楽器という点で関係がある)が一つの題の中にあるようなものを双関之題というのである。」と言われる通りであろう。渡辺秀夫氏は「双関語とは、同音に両義を懸ける修辭法、正確には「諧音双関語」であつて、同じ音のうちに二義を發生させる技巧をいう(王運熙「六朝樂府與民歌」)(渡辺秀夫氏「書評と紹介」松浦友久「万葉集」という名の双関語」)認識の方法としての日中比較詩学」(早稲田大学比較文学研究室「比較文学年誌」第三十二号、一九九六年)と言われる。また、佐藤道生氏は句題詩の説明の中で、「句題は一般的に二つの事物による複合題である。すなわち題中には二つの実字(名詞)が含まれる。この「松樹臨池水」ならば「松」と「水」(或いは「池」との組み合わせである。また時として一方の事物に並列構造を有する二字熟語、たとえば「山水」「花酒」「遠近」などの語が用いられることがある。このような二字熟語を当時「双貫語」と呼んだ。例えば「松竹有清風」(松竹に清風有り)という句題であれば「松竹」という双貫語と「風」との組み合わせである。その場合、句題には三つの実字が含まれることになる。」と言われる(佐藤道生氏「句題詩概説」(佐藤道生氏編著「句題詩研究」古代日本の文学に見られる心と言葉)一慶應義塾大学二世

紀COE心の統合的研究センター、二〇〇七年（平成十九）三月）。

次に、虚題と実題についてであるが、「虚実の題とは此に於いて辺々の説有り」と言うように、諸説ある。しかも、内閣文庫本などの刊本は、双貫の題と虚実の題の説明の、

其の躰二躰ある故に「聞鶯声」と云ふ三字は用なり。虚の題には「物を題するなり。前の「待花催勝遊」云ふ題の如きは花一字のみの躰なり。余の四字は用なり。」
という箇所と、虚・実の題の説明である、

此に於いて辺々の説有り。王沢抄の意に依れば、花を待ちて勝遊を催すの題の時は、花遊の二字は実の字、待催勝の三字は虚の字なり。又林下に芳草多しと云ふ題の時は、林草の二字は実の字、下多芳の三字は虚の字なり。此等は本躰を実と云ひ作用を虚と云ふなり。作文の大躰の意に依れば経籍の奥理に出でたるを之を実題と謂ひ、風月の浮花より懸けたるを之を虚題と謂ふなり。此は経教の典籍の奥理を作るを実と云ひ、花鳥風月の浮言を作るを虚と云ふなり。

已上の両説は和朝の作詩の躰なり。三躰の詩に載する所の虚実の躰は太だ別なり。儒者の名近くに相尋ぬべし。

という部分をすべて欠いて、「多義有り。（大小の虚実の題等、更に師受すべきなり。）」と言ひ、たいへん分かりにくくなっている。実際、

王沢抄の意に依れば、花を待ちて勝遊を催すの題の時は、花遊の二字は実の字、待催勝の三字は虚の字なり。
という箇所は、『王沢不渴鈔』にも見えるものの、

王沢抄に云ふ、双貫の題とは朝暮に鶯の声を聞くなり。朝暮の二字双貫なり。其の躰二躰ある故に鶯の声を聞くと云ふ三字は用なり。虚の題には一物を題するなり。

という箇所は、

次（に）双貫

（客の云く、双貫の題とは如何。予云く、句題五字の中に実の字三つ有る是れなり。）」

題

朝暮に鶯の声を聞く

と、『王沢不渴鈔』は言っていて（原文は漢文、また別の箇所では、
朝暮鶯（此の三字は実の字なり。聞声の両字、此は是れ虚字なり）

実の字三字是れなり。朝暮鶯の三字を出す。此の意は題の中で此の三字が肝要の字なりと云ふ事なり。依つて実字と云ふなり。虚実の二字を分別するに時の虚字、実の字と云ふ儀は非なり。

とも言っていて、混乱が見られるのである。その中でも特に、虚実の二字の題については諸説あつて、当時明確に説明できる状況ではなかつたことが分かる。

七、序と詩との作躰の事

七、序トシと詩シ作躰事

問フ、序ト与レ詩作躰如何。答フ、王沢抄云、

春日同 賦待レ花催勝遊詩一首〔并序〕

〔発句〕 一 観夫（以景物超 異物為初躰也。）

〔密々〕 山霞破 暖風（平）

〔上五／下六〕 数重之錦好 曝（他）

〔上四／下六〕 溪雪消 遲日（他）

〔軽々〕 一片之色 纒 残（平） 一段

〔上四／下六〕 于時（傍句）

風漸暖（他）而 聞 歌鶯之声 滑（他）

日已 遲（平）而 見 舞蝶之翅 輕（平） 二段

〔六字／長句〕 方 今（傍句）

待 新花之未 開（平） 催 勝遊之有 興（他） 三段

〔六字／長句〕 至 下 于如 中（傍句）

風暖 而添 濃（淡） 露染 而交 濃（淡）

〔軽々／上四下六〕 苑 中 句 韻（他）

遙 如 沈麝之 薰（平）

〔軽々／上四下六〕 庭 前 粧 散（他）

誤 疑 錦繡之 幅（平）

〔緊句〕 何物 如 之（平）

誰人不 賞（他） 〔四段〕

如 予者（傍句）〔此云 自謙句也。〕

不才 而探 紙（他）

〔漫句〕 蒙味 而染 筆（平）

推 当 唱首

已 迷 賦 花云 尔 〔五段〕

斯 地 勝遊 縁 底 催

待 花 終日 有 由 哉 〔灰哈〕

恋 粧 先 展 言 詩 席

期 艶 且 斟 命 飲 盃

歌 勸 和 声 鶯 未 出

舞 思 儂 曲 蝶 遲 来

楊 梅 桃 李 一 時 興

猗 矣 今 朝 早 抽 才

（つづく）

〔校訂注記〕

〔1〕 発句―諸本とも「観夫」の下にあるが理解しやすくするためにこの位置に移した。

〔2〕 「濃」の音「ぢよう」―底・尊「テヨウ」を歴史的仮名遣いに改めた。

〔3〕 平―底「平 八タハリ也」とあるが尊・内によつて改めた。

〔4〕 「儂」の音「れい」―底・尊「レン」を改めた。

〔注〕

「春日同じく賦す花を待ちて勝遊を催す詩」の詩序の構成要素などに於いて、「王沢抄に云はく」として説明する。その句は「王沢不

渴鈔』下の冒頭近くに載っているが、その説明の淵源はもちろん、『作文大體』にある。本稿では、『作文大體』を参考にしつつ、『王沢不渴鈔』の説くところをどのように『文筆問答鈔』に取り入れているのかを中心に見てゆく。

『王沢不渴鈔』下の冒頭近くで、
凡そ詩序等は傍字を以て前を詰め後を催すこと尤も之を存すべし。

と言う（原文は漢文。「傍字」は「作文大體」に見える語で、小沢正夫氏によると、「語例から推すと接続詞の機能をもつ語で」、「作文大體」には、

傍字
抑^ッ且^{モシハ}就^テ中^ク（等也、如^シ発句）

とある。また、その発句については、『作文大體』「筆大牀」に、

発句（施^レ頭）

夫^レ夫^レ以^テ原^レ夫^レ 夫^レ惟^レ 於^レ是^レ 方^レ今^レ 竊^レ以^テ 伏^レ惟^レ 覲^レ夫^レ

于^レ時^レ 蓋^レ聞^レ 汝^レ当^レ知^レ 所以^レ者^レ何^レ 如^レ此^レ類^レ言^レ 皆^レ名^レ發^レ句^レ 也

〔或ハ一字二字、或ハ三字四字、無^レ對。〕

とある（調点は返り点のみ付けた。発句とは「頭に施す」こと、すなわち詩序の初めに用いられる句のことである。『王沢不渴鈔』下では、先づ端^{はじめ}を發して事を叙ぶる詞（是を發句と名づくるなり）として（原文は漢文、

夫^レ 覲^レ夫^レ 竊^レ以^テ、夫^レ以^テ、蓋^レ聞^レ 巨^レ聞^レ

を挙げて、これらは、「申べ重ねて理を明らかにする詞」（申重明^レ理詞）と説明するなど、発句の例とその使い方を十九種に分類して示して

いる。当詩序の発句「覲れば夫れ（覲志は、『作文大體』「王沢不渴鈔」の両書に確かに見え、代表的な発句の語である。

次に、『王沢不渴鈔』では、詩序の構成は五段から成ることをいい、その初段は、「亭主の敏思名譽を美む」「地形の勝絶奇異を賦す」「時節の他に勝ることを時に述ぶ」「景物の異物超えたるを詠す」という「四つの次第」があることを言う。

『文筆問答鈔』の第一段では、このうちの四つ目、すなわち「景物の異物超えたるを詠す」が該当することが指摘されている。また、第一段に「密々、上五六」とあるのは、この部分の句の構成が、『作文大體』「筆大牀」の六種類の隔句のうちの一つである「密隔句」であることを言う。『作文大體』によると、

隔句（六牀有り。輕重疎密平雜なり。輕重を勝れたりと為す。疎密之に次ぐ。平雜之に次ぐ。六牀同じく平他声を調ふべし。）

（隔句（有六牀。輕重疎密平雜也。輕重為勝。疎密次之。平雜次之。六牀同可調平他声。））

とあり、輕隔句（上四下六）、重隔句（上六下四）、疎隔句（上三下不限多少）、密隔句（上五已上下六已上、或上多少下三有牀）、平隔句（上下或四、或五）、雜隔句（或上四下五七八、或下四上六五七八）というふうな句の構成を説明し、それぞれについての例句を挙げています。つまり、『文筆問答鈔』の「密々、上五六」は、上句が五文字、下句が六文字より成る密隔句であることを言っているのである。

次に、同じく上段の「長句」「緊句」「漫句」等についても、『作文大體』「筆大牀」に説明がある。今、例句を省いて解説のみを書き下

し文で示し、若干の言葉を丸括弧（ ）で補うと次の通りである。

壯句（三字対有り。発句の次に之を用ゐる。但し賦及び序には未だ必ずしも之を用ゐず。形に随つて之を施す。平他の声を調ふべし。）

緊句（四字対有り。或は胸（句）に施す。或は腹（句）に施す。

或は腰（句）に施す。賦には多く胸（句）に施すべしと云々。平他の声を調ふべし。）

長句（五字より九字に至り之を用ゐる。或は十余字を云へり。

対有り、平他の声を調ふべし。或は頭（句）に施し腹（句）に施す。賦には或は猶ほ腹（句）に施すべく見えたり。）

漫句（対合せず、平他の声を調へず。或は四五字七八字、或は

十余字なり。或は頭（句）に施し或は尾（句）に施し、或は送句に代へたり。平他の声を調へず。）

送句（尾（句）に施す）

なお、平仄についてであるが、四段目の「幅」（はたもの、はたはり）は『観智院本類聚名義抄』に「幅（音福、ハタハリノ）」、『色葉字類抄』に「幅（ハタハリ・絹布等一也）」とあり、平仄は仄声（他声）であり、「平（声）」とあるのは誤り。したがって、この箇所は「平他の声を調へることができていない。しかし、『王沢不渴鈔』にその認識はないよう、何の指摘もない。同様に、五段目の「筆」も仄声（他声）の字であり、「平（声）」とあるのは誤り。ここも平仄が合わない。

漢詩についてはすでに述べた。ここでは、『王沢不渴鈔』下にも若干の解説が付いて載っていることを指摘しておく。

（つづく）

【付記】

本研究は平成二十五年年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））JSPS 科研費 23520254 の助成を受けたものです。

前稿は、『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』第十二号、二〇一四年三月刊予定。